

菊池農業高等学校 令和3年度(2021年度) 学校評価表

1 学校教育目標

～『認め、ほめ、励まし、伸ばす』教育の充実を目指して～

1 教育目標

『生徒が輝き、地域をきらめかせる菊農教育の創造と実践』

【方針】

「熊本の心」を基本理念とし、夢の懸け橋教育プラン、県立高等学校における教育指導の重点、学校安全・安心推進課取組の方向、体育保健課取組の方向、人権教育の推進に当たって、特別支援教育取組の方向、社会教育課取組の方向などを指針とし、豊かな人間性と社会の変化に主体的に対応できる生徒の育成を目指し、地域とともに活気に満ち溢れた学校づくりを目指す。

【スローガン】

『感動、感謝、思いやり、夢を育み未来を創る菊農生』

～あらゆる可能性を見つめ一歩前へ～

2 学校三綱領

- ・ 向学創造の精神を培う
- ・ 敬愛協同の美德を養う
- ・ 勤労剛健の気風を興す

3 目指す生徒像

- 1 夢の実現に向けて努力する菊農生
- 2 互いの良さを認め合い、隣人を思いやることのできる菊農生
- 3 意欲的に取り組み、リーダーシップがとれる菊農生

4 目指す教師像

- 1 使命感を自覚して、プロ意識が高く常に学び続ける教師
- 2 生徒への深い教育的愛情を持ち続ける教師
- 3 地域等との連携・協働しながら課題解決に向かう教師

2 本年度の重点目標

1 安全で安心な魅力ある学校づくりの実践

- ① 生徒の安全を最優先に考え、産業教育や人権教育の観点からの教育を推進する。
- ② 時代の進歩に対応できる最先端の農業教育を実践する学校づくりを推進する。
- ③ 学校の持つ教育資源を活用し、体験的学習から学ぶ学校づくりを推進する。

2 学習習慣の確立・わかる授業の実践と学力向上を図る。

- ① わかる授業、学ぶ楽しさを進め、基礎学力の定着に取り組む。
- ② 多様な教育課程のなかで、参加型の授業や、課題解決型、探究的な授業を進める。
- ③ ICTの活用、教材研究の充実、授業評価システム等の活用により、授業改善を図り、教職員の資質・指導力の向上に努める。

3 キャリア教育を充実する。

- ① 体験や進路情報を提示して、進路選択の幅を広げ、自己実現の指導を充実させる。
- ② 生徒の能力・適性を把握し、個々の可能性を最大限伸ばす取り組みを行う。
- ③ 資格取得等や各種行事に積極的に取り組み、キャリアプランニング能力の育成に努める。

4 基本的生活習慣の確立

- ① 挨拶や適切な言動のできる社会性を育てる。
- ② 豊かな心を持った生徒育成を目指し、ボランティア活動や地域交流活動への参加を推進する。
- ③ 校内外の清掃や環境美化に努め、公共心や道徳について学び育てる。

5 生徒指導の徹底と生徒支援体制の充実を図る。

- ① 教職員が一丸となり、組織として適切な支援体制で対応する。
- ② 教育行動指標を踏まえ、生徒に自信を持たせ、自己肯定感・自己有用感を高める。
- ③ 保護者との連絡を密にし、連携した指導を推進する。

6 人権教育の推進

- ① 教育活動におけるすべての場面を人権教育と捉え、指導を行う。
- ② 言語環境を整え自他の命を大切にすることを育む指導を図る。
- ③ 研修等により、教職員の人権意識を高め、資質や指導力の向上を図る。

7 部活動や生徒会・農業クラブ・家庭クラブを活性化する。

- ① 部活動を含む特別活動を推進し、参加率を向上させ、意欲的に活動する態度を育む。
- ② 生徒の主体性を尊重して成果に拘ることなく、教育の一環として日々の活動の充実に向けた指導に努める。
- ③ 地域と連携し、地域に根差した研究及び発表に努める。

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	目指す生徒像実現のために学校目標の周知を図るとともに、教育活動の着実な実践による活性化を図る。	<p>学校の教育目標及び本年度の重点目標の周知を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が共通認識として実践する。 ・保護者、生徒の学校教育目標認知度を保護者80%以上、生徒70%以上に高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議、研修等で常時啓発する。 ・学校ホームページ、生徒総会、育友会総会、広報誌等を通じて啓発を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教育目標、重点目標の周知を育友会新聞や学校ホームページで啓発に取り組んだ。生徒57%、保護者78%の認知であった。職員は、自己評価において学校の教育目標に則り具体的な目標を立てることにより96%の高い認知であった。次年度も更に生徒・保護者に対して、日頃の学習活動や学校行事等をとおして認知度を上げる取り組みを強化したい。
		<p>自信に満ちた行動力を発揮し、社会で生き抜く力を持った生徒を育成する。併せて、生徒の自己肯定感を高める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な生活習慣を身に付け、夢を語り、夢の実現に向かって、果敢に挑戦する生徒を育成する。 ・本校における通級指導を充実させ、全職員が理解し実践力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の向上を図る。 ・朝読書の充実を図る。 ・農業の専門性を高める教育の推進を図る。 ・通級指導に関する職員研修等をとおして、全職員への周知と共通認識を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力向上の取り組みとして、SHR前に朝読書を実施して4年目となった。職員の啓発及び生徒の自覚により、年々成果が見られる。学校生活のスタート、基礎学力及びクラス雰囲気の上昇に繋がっている。 ・開設4年目となる「通級による指導」は十分な成果をあげている。しかし、生徒の49%、保護者の37%が「通級による指導」が実施されていること(実施内容含)を詳しく知らなかった。生徒、保護者の認知100%に向けた周知の徹底のみならず、近隣の小・中学校に「通級による指導」について、正確な情報提供を更に努めなければならない。
	校長を中心とした指導体制のもと学校教育目標を実現する。	<p>学校教育目標実現に向けた職員の意思統一と組織の活性化を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・職員研修の充実と各部の連携推進及び学科間の協力体制を促進する。 ・新入生充足率80%以上に向けた取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒理解に係る職員研修を充実させる(学期に1~2回)。 ・学科・学年主任、各部主事等の融合を図る。 ・学年主任を中心とした学年団(生徒・職員)の結束を強化する。 ・夏季休業中に、県下の全公立中学校訪問を実施する。 ・獣医系大学合格等、生徒の夢の実現を達成させる為の指導体制を強化する 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・支援を要する生徒や課題を抱える生徒の生徒支援、生徒指導をスムーズに実施するための職員研修(複数回)、隔週1回の生徒理解・特別支援教育推進委員会の開催、関係者による教科連絡会により、情報の共有を図り継続的な支援ができていた。「通級による指導」は巡回指導員のサポートもあり計画通り実施することができた。次年度は実施方法を再考し、更に生徒・保護者のニーズに応え成果が上がるよう取り組む。 ・特別支援教育支援員の配置により、該当生徒の学習保障も達成でき十二分な成果が得られたが、支援員を必要とする生徒が増えている現状である。 ・企画会の実施により、学校が抱える喫緊の課題を主任主事部長が共有し、課題解決に向けた策を講じる機会を持つことができた(月に2回実施)。 ・生徒の夢に実現に向けて、生徒職員が一丸となり取り組んだ1年であった。早稲田大学、慶應義塾大学へ4学部(延べ4名)の複数合格、久しぶりの獣医学部獣医学科合格、国公立大学2名合格と、本校開校以来の快挙であった。

		安全安心な学校を目指し、災害時及び生徒の健康管理等における危機管理の体制を構築する。	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急時の指示系統や連絡体制、地域と連携した防災マニュアルの再構築を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者連絡システム(学校安心メール)、ホームページ活用等による連絡体制を強化する。 ・総合型コミュニティスクールを充実させる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページと「学校・安心メール」システムを活用し、緊急連絡(主にコロナ関係)や行事連絡(行事の事前連絡等)や必要な情報を迅速に伝達することができた。 ・2年目となった総合型コミュニティ・スクールの運営はコロナ禍もあり計画通りに実施できなかった。次年度は運営を是非とも軌道に乗せたいと考えている。
		学校情報を分かりやすい内容で定期的に発信する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページ掲載情報をタイムリーに更新する。(特に、新着情報) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページのシステムを職員に周知し、各行事の情報発信を学科毎、タイムリーに更新する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教務主任、情報担当者、学科主任が中心となり、学校行事を始めとする学習の様子、部活動の活躍、進路決定等の情報発信ができた。タイムリーな話題を常に発信することに努め、その取り組みが生徒募集の一因になることを改めて認識した。課題として、学科情報で学科間での隔たりが見られたことである。
		業務改善、働き方改革を推進して、長時間労働の解消を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・主任・主事・部長の意識改革を促し、トップダウンだけではなく、ボトムアップも意識しながら、業務改善、働き方改革を実現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週水曜日を18時までの完全退庁を実現する等、職場の超過勤務時間年平均(1人当)360時間、月30時間以内を実現する。 ・朝会の実施、週2回以内を定着する。 ・主任主事部長を中心に業務改善に向けての取組を推進し、年度末反省にて前年度より改善されたと職員が体感する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の約90%が働き方改革を意識し、自己の課題に本腰入れて取り組んだ1年であった。結果として超過勤務時間年平均(1年間)360時間、月30時間以内を達成できる見込みである。『私の健康が家族を笑顔にし、生徒に希望を与える』を合い言葉に取り組んできた結果である。次年度も継続して働き方改革に取り組んでいきたい。
学力向上	生徒一人ひとりを理解し、授業の工夫・改善と個別指導を徹底(学びのUD化)する。	生徒の学習意欲を高める。もっと知りたくなくなる授業を展開する。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が楽しく登校し「わかる・できる・もっと知りたくなる」を実感する授業を展開する。 ・学びのUD化に努める。 ・授業実施者がICTを駆使した授業展開ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育環境の工夫、ルールの明確化、視覚的支援の充実を図る。 ・ICT機器に関する職員研修を充実させる。 ・コロナ禍に対応した、オンラインによる学習支援を更に充実させる。 ・新学習指導要領に対応した評価規定を完成させる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の71%が本校の授業内容に興味関心を持っていると答えている。各教科で授業のUD化のみならず、授業のICT化が急速に進んだ1年であったことから、次年度は、教材研究、研究授業等で職員の自己研鑽を更に図らなければならない。 ・新学習指導要領の導入に向けて、導入趣旨の認識の再確認のみならず、評価規定の具現化に向けて組織で取り組んだ結果、導入の準備は整いつつある。今後は校内研修で実際の授業を通して、更に職員が学び合う機会を増やす必要がある。 ・HR教室、廊下階段、農場におけるUD化の一つである掲示教育は環境が整ってきた。次年度も更に推進したい。

		習熟度に合わせた授業を展開し、わかる喜びを感じる授業を実践する。	・習熟度別に授業内容を組立て、「基礎学力」および「生きる力」を身につけさせる。	・欠点保持者及び希望する生徒等に対し、学びなおしを行う場を設定する。	B	・学年団として、課題を抱えた生徒の学習対策に奔走していただいた1年であった。粘り強い指導により成果が充分に見られた。 ・数学については習熟度別学習(菊農式)を取り入れ展開している。成果は十分に見られている。しかし、基礎学力が低くサポートを必要とする生徒も多く、わかる授業、興味関心を高める授業の展開が今後も必要である。
	教職員と生徒が一体となった授業(公開授業の実施、及びグループ学習の導入)を実施する。	生徒の興味関心を引き付ける授業の展開を行う。	・学科・教科別に研究授業(アクティブラーニングを重視した授業、UD化を意識した授業の展開)による資質向上を図る。	・年間をとおして、統一したテーマをもとに、各学科、教科ごとに研究授業を実施し、授業改善に生かす。	B	・「授業のUD化」「授業におけるICTの活用」を年間テーマとして、職員研修、研究授業等を計画したが、研究授業に関しては、分散登校等もあり満足に実施できなかった。 ・「授業のUD化」「授業におけるICTの活用」のポイントを意識しながら、授業に取り組む職員が増えてきている。一人一台端末の導入が職員の意識の高揚繋がっていることは言うまでもない。
			・授業の公開による教職員の授業力及び探究心の向上を図る。	・教職員相互の「学び合い期間」を設定し、授業見学と授業評価を実施しスキルアップに繋げる。 ・公開授業週間を行い、外部からの見学者に率直な意見を求め、授業改善に生かす。	B	・コロナ禍による分散登校等により、計画が頓挫してしまったが、「授業におけるICTの活用」に関しては職員研修が進み、職員同士が協働して授業改革に向かう姿が随所に見ることができた。次年度は実際に研究授業等を通してその成果を検証する1年としたい。 ・オープンスクールはコロナ禍で実施できなかった。次年度は是非とも実施し、菊農の教育実践力を示したい。
キャリア教育 (進路指導)	キャリア教育推進のため、進路指導力の向上に取り組む。	農業経営者育成を主としたキャリア教育を学年に応じて実践する。	・先進農家視察、現場実習等をとおして職業意識の高揚を図る。	・実験実習等による体験学習の充実を図る。 ・現場実習をとおして進路意識の高揚を図る。 ・現場実習の実施不可に備えて、代替案を各学科準備する。	A	・卒業生や地域の方々、関係企業、関係行政機関のご協力により、2年ぶりに縮小版ではあったが、現場実習・インターシップを実施することができた。受け入れ先から高評価をいただき、生徒の自信に繋がったようである。生徒の職業観を育成し、農業経営や農業関連産業を始めとする就職、また、上級学校を始め将来を視野に入れた進学先を意識させる一助となった。
		キャリア教育の充実に向けた教職員の指導力向上を目指す。	・校内研修や農家、企業等の訪問を通じて進路指導力の向上を図る。	・コロナ禍に対応した、進路情報及び企業訪問等による企業情報の共有化と、指導の統一を図る職員研修(2回以上/年)、学年会(適宜)を実施する。	A	・キャリアサポーターを中心とした企業訪問を積極的に実施し、関係職員で情報共有し生徒へ多くの情報を提供することができた。この取組みが、3年生の『夢の実現』に繋がったことは言うまでもない。関係職員の地道な努力を評価したい。

	<p>早期の進路目標設定とその達成に向けた進路指導に取り組む。</p>	<p>生徒の進路意識を高めるための実態に即した取り組みを行う。</p>	<p>・講演会、進路講話等の進路学習をとおり、進路目標設定への意識付けを行う。</p>	<p>・コロナ禍であっても、最大限の工夫を行い、進路講話、進路相談会など新しい実施要領を構築する。 ・学年毎に年1回以上の進路希望調査及び学期に1回以上の個人面談等を実施する。</p>	<p>A</p>	<p>・コロナ禍で、今年の進路指導部及び3学年の進路指導は、生徒一人一人応じたオーダーメイドの指導に徹したことが大きな成果に繋がったと思われる。就職希望者内定100%実現に向けた取り組み、早慶W合格を実現した組織での指導、獣医学部獣医学科・国公立大学複数合格を実現したコアな指導法の実践等、様々な取り組みが功を奏した一年であったと感じる。 ・今年度は各学年、校内外で実施された各種の進路相談会へ参加はコロナ禍によりほぼ出来なかったが、進路指導部、3学年で充分にリカバリーができていた。 ・進路希望調査を基に、1、2年は進路希望に応じて個人面談等を随時実施し、夢の実現に繋げて貰いたい。</p>
		<p>生徒や保護者の思いを十分に受け止めた進路指導を行う。</p>	<p>・3年間を見通した進路指導を実施し、生徒の進路希望100%達成を実現する。</p>	<p>・学校ホームページを活用し保護者、生徒に対して進路に関する情報提供を行う。 ・面接指導の実施方法を検討、工夫し、より実践的な内容の指導を行う。</p>	<p>A</p>	<p>・生徒の65%、保護者の84%が、進路について親子間で話題にしている。保護者の75%が、生徒の事で気になったら学校に相談するとの回答からも、進路については本校職員と保護者の関係は良好であるようだ。学校と保護者が協働して生徒の進路指導に当たり、理想の結果に導くためにも、生徒間の意識の差を縮め、進路実現に向けた生徒自身の意識の高揚が更に求められる。</p>
<p>生徒指導</p>	<p>豊かな心を育む指導の実践に取り組む。</p>	<p>生徒会、農業クラブを中心とした自主的活動による活性化を図る。</p>	<p>・生徒会、農業クラブを中心とした生徒の自主活動や部活動、ボランティア・各種委員会活動の促進を図る。</p>	<p>・生徒企画による各種行事や委員会活動をとおりした自治活動力の育成を図る。 ・ボランティア活動への参加を推進し、社会に貢献する。 ・部活動の活性化に努め、加入率60%以上にする。</p>	<p>A</p>	<p>・生徒会、農業クラブともに、担当職員及役員の生徒が精力的に活動し、コロナ禍ではあったが、各種行事の企画・立案・実施ができていた。本校の学校行事は、生徒の75%、保護者の66%、職員の92%積極的に参加しているとの回答があった。次年度は多くの学校行事の実現を可能とし、生徒の自信の育成、保護者の教育活動への参加に繋げたい。 ・今年も制限があったなかではあったが、生徒会及び農業クラブ役員が中心となって菊池市のボランティア活動に積極的に参加し、菊池市から必要とされている人材であることを確認できた。 ・部活動への加入率が低いことは課題である。部員がいない、活動が停滞している部活の存続について、関係者で協議する時期に来たのかもしれない。</p>
		<p>農業教育における動植物の育成管理をとおりして豊かな心の醸成と、中途退学者の減少を図る。</p>	<p>・仲間との協力及び動植物の育成管理をとおりして責任感を育成すると共に、他者や周囲に配慮することができる心の醸成を図る。</p>	<p>・仲間と協力して作業をすることで責任と周への思いやりの心を育てる。 ・動物、植物との触れ合いをとおりして、命を大切に育む豊かな心</p>	<p>A</p>	<p>・生徒の多くが農業実習に真摯に取り組むことができ、動植物の管理をとおりして命の大切さや自他を認め合い協同する生徒の育成に繋がった。 ・共助の気持ちを持った心根の優しい生徒が多いが、何気ない言動によりトラブルに発展したケースが毎年発生している。日々の教育活動をとおりしてソーシャルスキル</p>

				と互いに協力し、互いを尊重する心を育成する。 ・上記の方策について、学校評価アンケートにて生徒の満足度90%以上とする。		トレーニングを実施し、コミュニケーション能力を更に高めていく必要がある。
規範意識を育てると共に安全教育の徹底に取り組む。	基本的な生活習慣の確立と規則やマナーを遵守する意識を高める。		・気持ち良い挨拶、制服の着こなし、時間を守る、貴重品の自己管理等、社会人となるための基礎基本を徹底指導する。	・朝の登校指導や定期的な指導の実施により、身だしなみの徹底を図る。 ・身だしなみ(服装・頭髪)については、社会情勢に応じた指導体制を整える等、全職員で統一した共通認識を持つ。 ・貴重品袋を活用した盗難防止に努めると共に、貴重品の自己管理の徹底を啓発する。 ・生徒、保護者向けのSNS教育を実施し、トラブルの未然防止に努める。	B	・生徒の約81%、保護者の85%が基本的な生活習慣は概ね身に付いているとの回答であった。職員・生徒による登校指導(毎朝)での声かけ、定期的な身だしなみチェック、朝読書の実施(毎朝)により、生徒は比較的落ち着いた学校生活を送っていると考えられる。今後は校則について見直すべき点は見直し、健全かつ生徒の自主性を重んじる菊農生への育成に努めていきたい。 ・今年度は整容検査の名称を「身だしなみチェック」に変え、生徒の自主性と自覚を促す指導にシフトした。学年職員を中心に全職員で取り組み、指導を要する生徒はいるものの、概ね良好であった。 ・今年度も盗難事案が数件発生した。生徒への貴重品管理の注意喚起、必要時の教室施錠、貴重品袋の活用等、盗難防止に今後も努めていきたい。
						交通事故や犯罪等に遭わないために、意識の高揚を図る。
人権教育の推進	豊かな人権感覚を身に付けた生徒の育成に取り組む。	相手の立場や心情を理解することのできる生徒の育成を図る。	・人権感覚を高め、心豊かな生徒の育成に取り組む。	・LHRをはじめ様々な授業をとおして人権感覚を育む。 ・人権講話や人権講演、平和登校日など、機会を捉えて人権の大切さを伝える。	A	・本校の人権教育は概ね充実しており、相手の立場になって行動できる生徒の育成に繋がっている。コロナ禍で未実施、規模縮小もあったが、年間を通して実施される人権教育LHR、人権教育講演会、人権に関する校外研修への全職員の参加等により学校全体の人権意識を高めることができた成果だと考える。 ・夏休みに実施する平和教育はコロナ禍により実施できなかった。戦時中の軍事空港跡地に設置された本校の使命として、次年度以降も平和教育を実施し、命の尊さ、平和な日常に対する感謝の言葉が飛び交う学校であり続けたい。

		指導する職員の人権感覚を豊かにする研修を実施する。	・毎学期に配慮を要する生徒等に関する研修を実施することで生徒に対する人権感覚を磨く。	・人権教育推進委員会を定期的に行い、共通認識と共通実践を図る。 ・学期に1～2回の生徒理解研修を実施し、全職員で課題を抱える生徒の状況を把握し、共通理解を図る。	B	・生徒理解研修を年度当初に実施し、全職員で配慮を要する生徒や、課題を抱えさせられた生徒の状況把握をすることで生徒理解の一助とすることが出来た。しかし、配慮を要する生徒の増加に伴い、職員間の共通認識が十分とは言えないケースも見られた。 ・隔週1回実施される生徒理解・特別支援教育推進委員会が人権教育推進委員会の領域も担っているが、次年度の人権教育推進委員会の充実に向けて策を講じなければならない。 ・本年度より女子スラックスを導入し、多様な生徒が自分らしく学校生活を送れるようLGBTQIに関する講演会を開き、多様性を認め、互いに尊重し合えるような取り組みができた。
	命を大切にす 心の育成に取 り組む。	専門教育をと おして、命を 大切にす 心の育 成に取 り組む。	・自分や他者の命を大切にすることのできる生徒を育てる。本校の人権教育が相手の立場に立つ生徒の育成に繋がっていると実感する生徒を、80%以上にする。	・人権委員会を中心に「いじめ撲滅宣言」の読み上げ、クラス掲示を行う等、感謝の心と他者を認める心を意識させる。	B	・授業(人権教育LHR, 保健, 専門教科)をとおして、命の大切さ、命を育むことの尊さ、他者の個性を尊重することの大切さを学ぶことができた。 ・コロナ禍により放送ではあったが、全校集会で人権委員長が「いじめ撲滅宣言」を読み上げ啓発を図ることで、お互いを認める心を意識することができた。
い じ め の 防 止 等	命を大切にす る、いじめ をしない、 いじめ防 止に取 り組む 生徒の 育成に 取 り組 む。	生命尊重の意識と自尊感情の確立を図る。	・他者を思いやる心の醸成だけではなく、自己肯定感を高めることができる生徒を育てる。 ・本校はいじめの防止をはじめ、人権教育の姿勢を基本に生徒への対応が行われていると実感する生徒を、80%以上にする。	・LHRや日常の授業・実習で、命を育て、命をいただくことで生かされていることを学ぶ。 ・特に、専門教育を通して、他者を思いやる心、協働する心を育成する。	B	・専門教科の授業では、各科で特色ある教育が実施されており、多くの生徒がやりがいを感じている。日々の学習をとおして日常生活における自他の尊厳に繋がられるよう授業の深化を更に図っていききたい。
		いじめ防止に積極的に取り組むことのできる生徒を育成する。	・いじめの未然防止や早期発見、SNS等のトラブル防止に努める。	・LHR等で人権問題を取り上げ、いじめや差別をなくす生徒の育成と正しい言動ができる生徒の指導を行う。 ・日頃から担任を中心に個人面談の機会を設けるなど、生徒の日頃の悩みを把握し、いじめの未然防止、早期の発見に努める。併せて、寮生のメンタルケアを計画的に実施する。	B	・定期的に入権教育LHRを実施することができた。また、全校集会や学校行事など、様々な場面で人権意識の向上に努めており、生徒の人権感覚を高めることができた。 ・各学期で実施する心のアンケート、それに基づいた個人面談を丁寧に実施し、いじめの防止と早期解決に向けた取り組みを組織的に行うことができた。結果として、生徒の72%、保護者の92%が本校に入学して良かった、入学させて良かったとの回答に繋がったのではないだろうか。 ・今年度もSNSによるトラブルが発生した。今後も、保護者と連携し我慢強く丁寧に指導を続けていく必要がある。併せて、外部講師によるSNSトラブル防止教育の充実を図り、生徒の規範意識を高めていきたい。

専門教育	地域と連携した農業教育の推進に取り組む。	スマート農業・GAP教育等をとおして、地域と連携した農業教育の推進に取り組み、農業経営者を育成する。	・外部講師等を活用して、就農教育の推進と地域に開かれた農場の展開に努める。	・農場を地域に開かれた学校の拠点とし、農業の新しい技術や情報を校外に積極的に発信する。 ・5年後を見据えた農場改革をスタートさせる。	A	<ul style="list-style-type: none"> 生徒減少、職員の働き方改革等の観点から、本腰を入れて農場規模の適正化、農場経営の在り方に直視しなければいけない状況になってきた。農場長を中心に現場の声を吸い上げ、慎重に進めていきたい。 県版GAP取得によって、授業のUD化、農場の環境整備、衛生面を配慮した収穫や出荷調整、安心・安全な労務管理等ができています。 農業科で取り組んでいる菊池市との連携事業(放置竹林の活用、菊芋利用の模索)がコロナ禍であったが、順調に進んでいる。 直進自動運転制御トラクター、大型ドローンを授業で最大限活用し、地域に発信していくことが次年度の課題となる。
		農業教育により自信と誇りを持った農業経営者と関連産業従事者を育成する。	・校内研修や農家、企業等の訪問を通じて進路指導力の向上を図る。	・コロナ禍に対応した、進路情報及び企業訪問等による企業情報の共有化と、指導の統一を図る職員研修(2回以上/年)、学年会(適宜)を実施する。	A	<ul style="list-style-type: none"> 全国学校農業クラブ鑑定競技の部に1名参加し優秀賞を獲得、意見発表の部では入賞は逃したが、九州大会では最優秀賞を獲得した。また、アグリマイスター認証(プラチナ1名、ゴールド2名、シルバー5名)や農業技術検定2級合格者5名などは大きな成果である。 正副担任、学年、学科、進路指導部の協働により、獣医学科1名、国公立大農学部系への複数名合格を実現した。進路に関しては『チーム菊農』が確実に機能していた。 蒼生会の出前授業は次年度復活させたい。
環境教育	環境保全活動や環境問題に積極的に取り組む。	学校版環境ISOに取り組むと共に、農業を通して環境整備に意欲的に取り組む態度を育成する。	・環境にやさしい農業を実践し、環境保全や環境問題への関心を高め、意識的に取り組む態度を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> 学校版ISOの認定校として、校内外のクリーン活動を更に充実させる。 地域(主に管内の公的機関を中心に)を含めた花いっぱい運動を展開する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ISOの宣言項目を教室や職員室へ掲示し、生徒職員で取り組みチェックを行った。その結果、意識の向上が見られた。 来年度も引き続きプラスチックゴミの分別徹底、裏紙の利用、節電、節水の啓発について、積極的な取り組みを充実させる必要がある。
		美しい学校づくりをテーマに環境美化活動に取り組む。	・環境美化活動を実践し、美しい環境の中で豊かな感性を育む。	<ul style="list-style-type: none"> 美化コンクールを実施する。 美化委員会を中心に学校周辺の美化活動を年5~6回行う。 ゴミの分別を更に進め、環境に優しい生徒を育成する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 毎学期、校内外のクリーン活動と美化コンクールを実施したことで、教室や校外の環境美化への意識を向上することができた。 花いっぱい運動は、農業クラブや全学科で積極的に取り組んだ。菊池市文化会館の花壇植え替えは実施できたが、コロナの影響で中学校との交流学習(花壇作成)はできなかった。

保護者との連携	育友会との積極的な連携・協力に取り組む。	円滑な学校運営のために情報提供に努める。	<ul style="list-style-type: none"> 保護者へ学校行事や生徒の様子等の情報提供に努め、本校への理解と協力を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 年3回の育友会会報作成等に協力し、本校のPRに努める。 ホームページや安全安心メールを活用し、育友会活動の状況や、学校行事の周知徹底に努める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事・育友会活動が縮小されたなか、今年度は育友会会報を2回発行し、生徒の学習活動や各種行事、育友会活動を紹介し、菊農のPRに努めた。 学校安心メールの活用は、昨年度より充実させることができ、約60回送信することができた。次年度は、学年、学科単位でも送信できるように改善したい。
		PTA活動のさらなる活性化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事への保護者の出席率向上を図る。 ミニバレーや各種研修会などの運営を工夫しながら、有意義な育友会活動を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者への迅速な情報提供に努め、保護者と学校の協働関係を図る。 保護者が参加しやすいように開催曜日や時間帯を工夫し、多くの意見を取り入れて活発化を目指す。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 育友会活動の縮小、育友会総会の中止等、2年続けて育友会活動が充分に行えなかったが、理事会等は開催して活動の方向性は検討してきた。次年度の通常実施を願うばかりである。
地域連携	学校運営協議会を通し、地域と連携協力体制を確立する。	自主的に学び、考え、行動できる生徒の育成に努める。	<ul style="list-style-type: none"> 地域の活動をととして、ボランティア活動に参加するとともに、地域住民とのコミュニケーションを深める。 防災教育の3原則である「知識、技術、心」を軸とし、防災意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の美化作業や子ども食堂運営等に積極的に参加する。 学校行事、農産物販売情報等をホームページ、広報誌等で情報発信し、地域住民の来校のきっかけとする。 教科、集会等で各災害の発生メカニズムと対応策を理解する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 花房寮生を中心に有志を募り、子ども食堂のボランティア等、数少ない地域との交流を実施した。次年度は近隣自治会の美化活動、餅つき大会等地域に必要とされる学校としての活動を再開したい。 今年度も授業中に地震発生時の安全行動(シェイクアウト)訓練を2回実施した。生徒の意識も年々高まり、意義ある訓練であった。来年度も更に充実させたい。 菊池市総合防災訓練が本校をメイン会場として開催され、生徒会役員が避難所設営、避難所運営を体験し、避難訓練にも参加した。生徒の防災意識を高めることができた。
		災害時の連携体制や防災システムの構築に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> 総合型コミュニティスクールの充実に向けた取り組みを図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 防災マニュアルを共有する(保護者、学校運営協議会)。 地域と協働した合同防災訓練を実施する。併せて、事前・事後の打合せも行う。 総合型コミュニティスクールの充実に向けて、関係者との協力体制を強化する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 地域、行政機関からの意見・アドバイスをいただき、防災教育に対する連携を強化することができた。 地域合同での防災避難訓練の実施は今年も実施できなかったが、防災講演には地域の方に参加いただいた。次年度は合同防災避難訓練を実施し、学校運営協議会を深化させたい。

4 学校関係者評価

- 先生方の熱意が伝わって来る。大変忙しい中での働き方改革が実績を上げていることは、素晴らしい。近年教員への志望者が激減してきているが、やるがいと共に、多様な生き方が可能となるような職場であることをしっかりとPRしていくことが大事である。
- 毎日の教職員の継続した取り組みが成果として表れていること視えた。
- コロナ禍により活動が制限される中でも、創意工夫しながら生徒達の意識を高める事ができていると、アンケートの結果からも視える事に感心している。
- 菊農ならではの教育活動に工夫があつていいと思う。農業のIT化、学習全体のICTの活用など、皆で知恵を出し合って頑張つて貰いたい。
- 今日の多様化した社会の中で、一部の普通高校を除けば、普通高校としてのアイデンティティを模索しているような状況だと感じる。そうしたなかで、菊農は進学にしる就職にしる、農業高校で学ぶことの意義をしっかりと生徒に意識させていただきたい。
- コロナが終息したら、近隣の小学校・中学校と小・中・高連携で出来ることを検討してみないか。
- 先生方でしっかり議論をし、自信を持って進んで貰いたい。教職員のやる気、愛情は子ども達に充分伝わるものです。保護者、子ども達とのコミュニケーションをしっかりと確保して貰いたい。菊農の将来に大きいに期待している。
- 菊池農高が総合型CSとして今後も運営を継続し大きく発展していくには、活動資金の確保、調達、教育委員会・県・国からの資金の援助等を陳情していく必要性を感じる。
- 早稲田大学、慶應義塾大学、鹿児島大学、酪農学園大学獣医学科等の合格に対し、菊農生の頑張りに敬意を表す。生徒の努力のみならず、先生方も指導に全力を注がれた結果であろう。この快挙を今以上に中学生にPRしてはどうだろうか。菊池市民にはPRできてはいるとは思いますが・・・。
- 卒業する生徒が「本当に楽しい高校生活だった」と言って貰いたい。その為には、地域の多くの人が生徒達と密接な繋がりを持つ。まずは、生徒達が地域の方々への挨拶を徹底すること。全国的にスポーツ強豪校は、地域の皆さんへの感謝を非常に大切にしている。地域の皆さんから本当に愛される生徒達になるため、先生方に更にご尽力願いたい。人生は思い出の積み重ねであり、如何に質の高い思い出にするかにある。先生方に期待したい。
- 消防関係者として出来ることは、今後も学校での防災教育【救急法指導(普通救命講習)：年に2回の体育館において全校生徒への心肺蘇生法・人工呼吸・AEDの使用取扱いの説明等】を実施する場合の支援を行う事である。生徒にとって面倒かも知れないが、是非とも実施して貰いたい。
- コロナ禍により多くの制限がある中で、出来る限りの教育活動を工夫・実施していると感じた。
- 多様化する価値観に自己を合わせていくためのスキルを、生徒自身で磨いていく機会が必要となる。既に、小学校でも学年ではなく、5～6年生を対象としたクラス毎のアンガーマネジメント、ストレスマネジメントの能動的授業を実施しているところもあるようだ。生徒への研修機会を設けるだけでなく、その実施方法についても検討すると、より良い効果が出てくるのではと期待している。
- 通級による指導の認知については、小・中学校や支援事業所等の職員の認知不足が大きな要因である。特に、中学校の特別支援教育コーディネーターが知らないことも多く、周知を進め、それを保護者や生徒に還元していただくよう働きかけていくことが大切だが、支援ニーズのある生徒さんが増えるという事も別の課題となってくる。
- 菊池圏域では近隣の公立高校よりも、熊本市の私立高校への進学が増加している。中学生の個々のニーズに応えられるよう細かく学科を創設され、設備も充実していることなどが理由である。中学生の進路相談の中では、「農業の勉強をしても、就労できる農業法人は少なく、家業が農家でなければ農業関係への進路は少ない。農業科を選ぶと単位数の関係で大学への進学も選択肢が狭まると聞いた。」という話しをされる保護者もいるようだ。生徒・保護者の多くは、農業高校へ進学するとその後の進路が狭まると思われている方も多く、今年度の早稲田、慶應合格など、バラエティに富んだ進路の充実をPRし続けることが大事である。
- 人対人のコミュニケーションを苦手とする子どもが、支援ニーズの有無に関わらず増えている。デジタル機器に対する集中や情報の取り入れの方がスムーズな生徒も多く、今後も効果的なICT活用の取り組みを期待している。
- 小・中では、WEBアンケートを取り入れた個々の活動の自己評価を行い、次への意欲向上の機会としている学校もある。熊大付属特別支援学校では、学校でのICT活用の取り組みを3年計画で研究・報告されているところであり、先生方への研修等でご示唆いただく機会を設けるなどしても良いのではないかと。
- 入学時・新学期時に専門相談機関の案内(どのような機関でどのような相談が可能か、どのように聞けばよいかなど、具体的に示す。)をこまめに配布周知し、外部機関で対応可能、自校で対応可能な件について分けている学校もあるようだ。相談対応される方が、高校での教育的支援や部活動の中学との違いについて理解されることが重要になるので、圏域の相談機関との意見交換等を実施するのも必要かもしれない。

5 総合評価

(1) 基礎学力向上及び専門教育の充実

新型コロナウイルス感染症防止による分散登校やオンライン学習により、全職員が chromebook の操作方法等を学習し指導に取り入れたことは大きな成果であった。今後も普段の授業においても ICT を活用した授業実践を推進していきたい。しかし、本年度はコロナ禍のため研究授業や公開授業の機会が全くなく、接触や密を避けながらの授業、オンライン・分散登校による授業など、生徒・教員ともに学びを深めづらい状況であった。新学習指導要領の実施に伴い、全職員が評価規準の作成に取り組んだ。また、2 観点以上を記入した考査問題の作成や評価の仕方等の教務説明を行うなど、新年度に向けてスムーズに移行できるよう今年度中に再度全職員に向けて情報を発信していきたい。4 年目となった朝読書は、分散登校等でカットすることもあったが、基礎学力向上のみならず、1 日の始まりに好影響を与え、落ち着いた環境で 1 日のスタートが切れている、言わずとも読書する習慣が付いてきた等の意見も多く、成果は確実に上がっている。

今年度、農業自営における即就農者はなかったが、農業法人や農家等への雇用就農は増加傾向にある。スマート農業の導入や就農支援により農業経営者、関連産業従事者への増加に直結するような農場運営を目指したい。資格取得に向けた取り組みがなされ情報関係・農業機械関係・農業技術検定・危険物取扱者等多くの生徒が受検の機会を得ることができた。特に農業技術検定 2 級 5 名合格、アグリマイスター顕彰 8 名合格（プラチナ 1 名、ゴールド 2 名、シルバー 5 名）は大きな成果である。県版 GAP の取得によって授業の UD 化、農場の環境整備、衛生面に配慮した出荷調整、安心・安全な労務管理等に繋がった。コロナ禍で農業クラブ全国大会が開催され、生徒の活躍の場が与えられたことはありがたかった。農業鑑定では全国大会優秀賞、意見発表大会では九州大会で最優秀賞を受賞する等各学科の積極的な取り組みが農業クラブの活性化に繋がった。

進路指導部・学年・学科との協働により、2 名の国公立大学、獣医大学獣医学科、早稲田大学 2 学部、慶應義塾大学 2 学部に合格、本校創立以来の快挙であった。今後も生徒のニーズを把握し、多様性に対応した指導体制を確立し、生徒を支援していきたい。オンラインではあったが、日仏農業教育連携（アクションプラン）、未来の畜産女子育成プロジェクト（デンマーク）、国連食糧システムサミット等に参加することで海外の農業について学ぶとともに異文化に触れ、大きな成長が見られた。

(2) 健全な心と身体を育む生徒指導

コロナ禍により、本年度もさまざま行事や取り組みが中止・制限された。最たるものは、全校集会、教育講演会、生徒会の各種行事・活動である。学業や学校生活を充実させ、メリハリをつけるためにも、今後は制約の範囲内でできることを考えて取り組んでいく必要がある。

年度途中に「整容検査」を「身だしなみチェック」に変更し、学期の初め及び中頃に「身だしなみチェック」を実施しているが、整容面で個別に指導を要する生徒が少なくなった。また、季節ごとに冬服や夏服の確認を行うことで、付属品の紛失や不備も確認できている。これにより、職員が定期的に検査することによって、生徒に整容規定を守らせるという意識から、生徒自身が普段から身だしなみを整え、それを職員が確認するという意識へ生徒、職員ともに変わっていく必要があると考える。今年度、教育委員会より「生徒の問題行動への指導の手引きについて」「校則の見直しについて」の 2 つの通知が出された。これをもとに、現在本校でも校則の見直しに取り組んでいるところである。同時に、これら通知は今後の生徒指導の在り方についての問いかけでもあるように思う。全職員で検討し、共通理解を持つ機会としたい。意見・認識の違いや思い違いから人間関係トラブル、いじめ問題が複数発生し、対応に苦慮したケースがあった。しかし、いじめ防止対策・心のケア委員会、生徒指導部、教育相談部と連携し、チームとして迅速に対処できたケースもあったので今後も継続していきたい。

相談や面談を行う生徒たちの不安や悩みをしっかりと受け止めることを大事にしてきた。その後、解決に向けた一歩をとともに考え、本人が乗り越えたときに共に喜び合うことで小さな達成感の積み重ねが生徒の安心と自信、新たなチャレンジに繋がっている。特に、本校ライフスキルの活動では、このような経験を積み重ねることができ、生徒の前向きな変化を見ることができる。「助け合い」を合い言葉にして、今年度は相談部会を学期に 2 回程度だったものを月に 2 回程度行うことで、各担当の仕事状況や学年を超えた生徒の状況も共有し、協力し合って進めることが増えた。また、他分掌、学年団、保健室などと連携しながら生徒の情報共有と支援を行った。SSW や SC の積極的な活用で多くの助言をいただき、迅速な対応に繋がった。また、障害者雇用についての研修会や 2 年生インターンシップ・現場実習での福祉就労を視野に入れた実習にも繋げることができた。

本年度、人権教育に関する職員研修を年 6 回計画していたが、感染症予防の観点から 4 回の実施となった。校外研修についても、昨年度の参加と併せて全職員の研修参加を呼び掛けていたが、研修中止などが相次ぎ 54%の参加率に留まったが、研修・研究会や人権教育に関するオンデマンド配信の活用を呼び掛け参加してもらうことができた。今年度からの女子スラックス導入は違和感なく受け入れられていると感じる。人権教育講演会において LGBTQ（生徒用講演会実施）についての学習を進めたことで、全生徒・職員の多様性についての認識が深まった。また、校内研修についても 2 学期より校内の ICT 化が急速に進んだこともあり、動画等を活用した研修を行うことができた。研修後は先生方から、これまでのよ

うに「人権について考える機会となった」「学び続けることの大切さを再確認できた」「部落問題や人権問題を自分ごととしてとらえる工夫や機会が必要」という感想をいただき、職員の人権意識の維持・向上には、たとえ ICT を活用した研修であっても、学びの場を確保していく必要があると改めて感じた。進路保障では、就職の集団面接で他校生が違反質問に答える中、毅然とした態度で違反質問だと指摘できた生徒もあり、長年の本校での取り組みの成果だと感じた。今後も途切れさせることなく、「言わない、書かない、提出しない」の学習を続けていくことが大切だと感じた。

(3) 夢の実現

本年度は、生徒72%、保護者92%が本校に入学して良かった、入学させて良かったとの結果であった。これは、3年生の進路ほぼ全員決定に依るところが大きい。大学や農業大学校希望者のほぼ全員が合格できたのは、担任をはじめ3年学年団、専門教科職員、プロジェクトチームの指導によるところが非常に大きかった(早稲田大2、慶應義塾大2、関西大、鹿児島大、熊本県立大、酪農学園大2(獣医1)、東海大4、熊本学園大、尚綱大、平成音楽大、ヤマギ動物看護大)。昨年度に続き、3学年の朝の連絡会を進路室で行い、進路部との意思疎通や共通理解ができた。キャリアサポーターによる月1回程度の就職情報通信も発行できた。また、就職困難な生徒への支援については、ハローワーク菊池と頻りに連絡を取り連携ができていた。①3年間を見通した進路LHRの計画と内容の充実、②各学年で定期的な進路希望調査と進路適性検査の実施、③校外でのガイダンス等への参加、④「キャリア・パスポート」(ポートフォリオ)の活用強化、⑤基礎力診断テスト(学びの基礎診断)の事前事後指導の徹底については、まだまだ改善すべき点は多いが、コロナ禍で制限が多い中、WEBを用いた取り組みがいくつか実現できた。Classroom【生徒用】進路指導室を開設し、進路決定者講話の配信や求人一覧の提示、オンライン企業ガイダンスの案内などを行ったことで、生徒が家庭内で進路について考え、話し合う機会になったと考える。①職員へ向けた定期的な進路情報の提供と研修会の実施、②企業訪問あるいは大学説明会への参加促進については、コロナ禍で中止や制限が多かったが、可能な限り学校説明会等に参加していただいた。また、ハローワークから講師をお願いし、学卒障害者雇用に関する職員研修を今年度も実施できた。次年度は3年生の進路決定に向けた具体的なスケジュールを提示し、年度当初にカレンダーのような形で示したい。併せて、生徒にスケジュール記入用紙を配付し自己管理を促したい。大学や農業大学校等志望者へのチームでの支援体制づくりを実現するため、年度当初に志望者の所属する学科の先生に相談し、できるだけ早く指導を開始する(ex.今年度の『早稲田大学合格プロジェクトチーム』)。企業ガイダンス等で、先方からなかなか連絡が来ず、急な変更、突然期限付きアンケートを要求されたり等、問題が多々生じたが、年度当初にきちんとした年間計画を作成し、要求に対応できない場合はお断りをする事ができた。LHRの曜日がキャリアサポーターの勤務日でないため進路学習が計画しづらかったので、次年度は曜日を変更したい。

本校教育の根幹でもある寮教育は、今年度も舎監39名(舎監宿直32名、舎監日直7名)の共通理解のもと、生徒の生活及び健康状況等の引き継ぎ業務を正確に行い、年間をとおして寮生(研修寮未実施)の殆どが基本的な生活習慣のもと、夢の実現に向けて寮生活を送ることができていた。寮生の一日の日課の周知、掃除や学習時間の習慣化(特に3年生大学進学希望者:今年度は男子4名、女子2名)、感染症拡大防止の徹底ができた。点呼時に寮長による指導など、男女寮長を中心とした自治活動、担任や学年をはじめ、生徒指導部、教育相談部、保健室などの協力による面談の実施や生徒指導及び生徒支援、次年度に向けた入寮条件の検討、事務室の協力による寮施設の営繕等ができた。研修入寮と教育入寮にかかわる体験入寮の実施については、感染症の収束状況や県教育委員会と協議し、令和4年度の実施の有無と方法を検討しなければならない。問題行動、いじめ、盗難の発生については、寮則(寮生活のしおり)、退寮基準の明確化と防犯カメラの設置を検討していきたい。貴重品は管理棟金庫の使用の徹底と、南京錠等の設置による自己管理を促して行きたい。支援の必要な寮生への対応については、担任や学年部、教育相談部(SC、SSW)、養護教諭との連携推進を強化したい。体調不良や緊急搬送については、保護者の協力が得られるように日頃からの連絡や信頼関係を深める取り組みをし、夜間は躊躇せず緊急搬送を要請したい。

6 次年度への課題・改善方策

○ICTの活用は急激に進んだが、学習に効果的な活用法はまだ十分ではなく、生徒の学力を保障していく上ではタブレット上の授業についていけない生徒もあり今後検証が必要である。

○成績・出欠入力等の確認に多大な時間が必要なため、確認人員を増員するなど部署内で協力体制が取れた。また、提出締め切りの1時間繰り上げに先生方が協力いただき、昨年度より係の負担軽減が見られた。しかし、一部の先生方において確認不足が散見され、その確認に時間がかかっている。成績・出欠入力の間違ひは、大きな問題になることがあること

を職員一人ひとりが自覚をもって取り組む必要があると感じる。

○農場各部門において、生徒の実情や生徒数に応じて、規模の縮小や管理の在り方を見直した。今後も学校の働き方改革の推進にあたり、教育課程や生徒数に応じた農場規模を検討していかなければならない。一方、農業技術の革新が進む中、老朽化する施設・設備での教育活動にも限界を感じる。農場でのWi-Fi整備やスマート農業の導入も実現したい。

○農業鑑定において県大会の上位入賞が減少している。熊本大会に向けて指導体制の見直しが必要である。

○shareを活用することで、情報を共有しインターンシップ等の行事で各科の連携を図ることができた。しかし、業務によっては一部の職員に負担がかかるものが見られた。そこで、農業部の分掌を見直し、担当者・輪番を整理することにした。

○今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、交流学习等十分な活動ができず、各学科のHPやマスメディでの情報発信も不十分であった。

○原付講習会を新規通学者対象には各学期はじめに1回、許可生徒対象には年3回の合計6回実施している。許可生徒には別日程で欠席者への指導を行うことが度々あるため、かなりの時間をかけている。このため、許可生徒の講習会は年1回に減じる方向で検討している。生徒の安全や地域社会に迷惑をかけさせないことを考えると、通学を許可する限りは指導を徹底して、違反や事故、近隣からの苦情の数の増減等を注視しながら改善していく。

○生徒・保護者の相談、面談やSSW相談、ケース会議、教科担当者会など放課後の実施が多くなるため、業務時間の延長がやむを得ない状況であった。

○登校時間に間に合わない生徒はなかなか減らないが、生徒昇降口での遅刻者確認、教室への入室許可証を発行する際に根気強く声かけを行い、改善を促している。昨年度多発した貴重品の盗難事案は、今年度は激減した。貴重品袋の活用や移動教室や学校行事の際に行うこまめな教室施錠等により一定の成果が現れた。しかし、自分で管理するという意識が低い生徒も多く、機会を見つけ根気強く指導をしていかなければならないと感じる。

○スマートフォン等も同様で、貴重品としての管理にあわせ、マナー及びモラルについて生徒の意識を高めていかなければならない。特に、オンライン上のトラブルや被害・加害を防ぐため、職員研修、生徒及び保護者向けの講話を次年度も実施する予定である。

○特定のクラスで、授業態度及び生活態度の悪化が問題事案として挙げられたため、授業の開始前と終了後の見守りや授業のサポートなどを職員間で協力して取り組んだ。来年度は落ち着いた生活態度の構築に繋げるためにも、今後も「先言後礼」を授業や集会で徹底させたい。

○悩みを抱える生徒だけでなく、学校生活や学業への意欲が低い生徒も保健室を利用することが多いため、保健部や教育相談部との連携を更に深め対策を講じていきたい。

○個別の教育的ニーズのある生徒が増加し、中でも中学校と同様の支援を希望されるケースへの対応に苦慮することが多くなってきた。校内支援体制の充実に向けて、本校では今後どうあるべきなのか職員間で知恵を出し合い、職員の資質向上に繋げなければならない。併せて、校内職員だけによる解決が困難なケースも想定し、いつ何時にも専門機関や行政と連携が取れるような関係を再構築する必要がある。

○今年度も個別の教育的ニーズのある生徒について、特別支援教育支援員の配置が実現できた。「学習・生活サポーター」として、生徒の日々の安定した学校生活の実現に向けて十分すぎるサポートをしていただいた。しかし、支援員の配置が1名であるため、対象となる生徒が制限される。今後も教育委員会への増員要請をお願いする。

○担任、教科担当、通級指導担当、特別支援教育支援員と特別支援教育コーディネーター間で緊密に情報を共有し、支援にあたった結果、該当生徒は、比較的落ち着いて充実した学校生活を送っていた。

○人権教育を充実させるために、人権教育推進委員会の機能を更に活発にしていくことが大切である。

○学習会においては、何度か担当者以外の職員に参加していただいたので、引き続き全職員へ呼び掛けていくことが必要である。

○求人票が届いた時の作業は膨大であるので、次年度も応募前職場見学の予約に関する作業は学年団と連携して行うこととする。

○寮生の自立が不十分なため、舎監による指導や支援の負担が大きいが、舎監でチームを組んで花房寮の健全運営、寮生の健全育成に全力で当たりたい。

○今年度、農場で機械類の故障や公用車の自損事故が多く見られた。共有である農業機械関連車両、器具等の有効活用と整備、取り扱いに関する認識と勤務時間に相応した利用について見直していきたい。

○多様な生徒に対応しながらの農場運営が求められる。そこで、教育相談部との連携を更に強化し、ライフスキルの教材として、農場での活動も導入する必要がある。

○人権教育研修や人権教育を学ぶ機会をどのように保障していくか、コロナ禍での課題である。改善策としては、リモート講演やオンデマンド配信による研修など新たな学びのかたちを模索していく必要がある。

○生徒の多様性を認め合う力不足、教員の人権問題に対する情報共有不足、また、生徒間トラブルに対する認識の差による対応の遅れと問題の長期化、人権教育推進委員の先生との

連携不足などが課題である。今後も、生徒・職員の人権意識を高める授業や研修及び速やかな情報共有がなされるような環境づくりが必要である。

- 退学、不登校生徒は、コロナ禍において増加傾向にある。目的意識を持たずに入学してきた生徒への支援・指導をどう進めていくかが課題であり、中学校との連携・情報交換を今後も続けていきたい。
- 次年度は舎監の交代ルールを更に徹底し、健全な寮運営を行いたい。
- 寮内の美化コンクールや居室の整理整頓、掃除指導など、男性舎監による女子寮生の生活指導、多様化した生徒の生活指導に難しさがあつた。寮務部および寮常駐に女性職員を増員することで、問題を少しでも解消したい。
- 「通級による指導」と中学校の「通級指導」の違いを今年度は県下の中学校に発信した。関係中学校の理解を今後も求めていきたい。
- 職員研修等をとおしていじめ問題に関する職員の資質を高め、共有すべき情報は共有し、全職員がアンテナを高く広く張り巡らせ、今後もいじめの未然防止や早期解消を目指して取り組んでいかなければならない。
- 情報モラル教育(SNSトラブル防止教育)の充実は本校の課題の一つである。職員の指導力の向上、関係機関との連携、保護者への協力のみならず、関係機関(専門機関)と連携して情報モラル教育を進めていきたい。
- 生徒募集に関しては、夏休み期間を利用して県内の全公立中学校にパンフレット等を持参し訪問した。大きな生徒募集には繋がらないかもしれないが、この活動は次年度以降も続けていきたい(H30, H1, R3 実施)。
- ホームページの更新は生徒募集に繋がることを念頭に、学校行事・学科情報・部活動の報告等が沈滞しないように、タイムリーな情報を随時載せることができるような仕組みを構築したい。
- 「総合型コミュニティスクール」へ移行し2年目であるが、コロナ禍により予定の行事を実施できなかった。次年度は、今まで以上に地域との連携を深め「地域に開かれた学校づくり」を推進していきたい。
- 育友会総会の書面表決の回収率が64%程度(昨年度は68%程度)であったので、回収率(参加率)を上げる工夫を役員会等で話し合っていく必要がある。また、保護者の学校評価アンケートの回収率が6割弱であった。もう少し回収率を上げられるよう工夫が必要である。
- 今年度もコロナ禍で防災訓練等を実施しなかったが、自然災害はどのような状況下でも起こり得るので、いろんな場面を想定した避難訓練を工夫して実施していく必要があると考えている。
- ISOの取組については、宣言は行ったが掲示や学期ごとのアンケートは実施できなかった。次年度は必ず実施したい。
- 毎月、安全点検を実施しているが、老朽化の面で出来ないところが多数でてきている。そのため、校内予算だけでは賅えなくなってきた。しかし、修繕依頼の大小に関わらず、教職員の校内環境への関心には年々高まっている。
- サーキュレーター、換気、昼食時の指導など担任や学年の先生方には負担を強いる場面が多かった。新型コロナウイルスの対応等で環境ISO等の取り組みまで十分にできなかった。剪定くずの処理、破損箇所の修理等が多く、予算の関係上すぐに対応できない部分もあった。
- 校内を巡回していたが、サーキュレーターが可動していなかったり、欄間が開いていなかったりと、職員・生徒の感染予防に対する意識に温度差があるように感じた。学校全体で取り組んでいけるよう対応を検討したい。
- 美化コンクールについては、実施方法について検討が必要だと感じた。アンケートの中には、表彰を廃止し美化習慣として生徒の意識付けをはかっては?という意見もあった。美化コンクールの深化を次年度は図りたい。